

じょうこうじ 掟光寺だより

令和4年
1月号

行事案内

●1月16日(日)
「終い御講(寄合会計)」

13時30分から

仏教たとえ話

【福神と死神】

生と死、幸不幸、愛憎

世に稀な美女が、瓔珞を着飾って、ある家を訪れました。家の主人は彼女を見て、その美しさに目を見張り、「あなたは一体どなたですか」と聞くと、「私は功德天女です」と答えました。

主人が「あなたがいらっしゃる所には何かありますか」と聞くと、「私の住んでいる所には、たくさんの金銀・瑠璃・頗梨・真珠・珊瑚・琥珀・瑪瑙・象・馬・車など、すべてが整っています」と答えました。

主人はこれを聞いて、大変喜び、「ぜひ、あなたの福を私に分けてきてください」といって家に招き入れ、お香や花をささげ、礼拝しました。



すると、そこに、またひとりの女性がやってきました。その女性は天女とは全てが反対で、顔は醜く、みすぼらしい身なりをし、痩せ細り垢まみれ、思わず目を背けたくなるほどの痛ましい姿をしていました。

主人は一目見るなり、「お前はどここの者だ」と聞くと、女性は「私は黒闇という者です」と答えました。主人は「黒闇だ。どうしてそんな変な名前なのか」と聞くと、「わたしが行く所は、どの家もすべての財産を無くしてしまふからです」と女性は答えました。

主人はこれを聞いて、刀を取り出し、「縁起でもないやつだ。早く立ち去れ。さもないとお前を斬るぞ」と脅しました。

ところが、女性は逆に落ち着き払った様子で「あなたは、大変愚かな人と見えますね」と言い放ちました。主人が「どうして私が愚かなのだ」と聞くと、女性は「あなたが少し前に招き入れた女性は、実は私の姉で、私たち二人はいつも一緒にいるのです。もしあなたが私を追い出すなら、彼女も出てゆくことになるんですよ」と答えました。

そこで、主人は家に入って、功德天女に「門前に一人の女が来て、あなたの妹だと言っているが、それは本当か?」と聞くと、功德天女は「はい、彼女は私の妹で、私たち姉妹はいつも行動を共にして、これまで離れたことがありません。

私が善いことをすれば、妹は悪いことをします。私が利益をもたらせば、妹は反対にすべてを失わせます。しかし、私を愛するならば、妹も愛さなければいけません」と答えました。

主人は、苦り切った顔をして「善いことと悪いことを同じように受け入れ、姉妹ともに愛するべきだと言われても、私にはそんな芸当はできない。仕方がない、あなたも出て行ってもらう」といったので、姉妹は一緒に去って行った。

その時、主人は、二人が去ってゆくのを見て、「これでよかったのだ」と喜びました。



二人の姉妹は、また一軒の貧しい家に行くと、その家の主人は、大変喜んで、「これからはずっと、私の家にお住みください」というので、功德天女は「私たち二人は、さきほど別の家から追い出されたのですよ。あなたはどのようなわけで、私たちに居て欲しいといわれるのですか」と聞きました。



すると、主人は「あなたは今、私のことを思ってくださるので、私はあなたのために妹さんも同じように敬うべきだと思い、それで二人とも我が家に住んで欲しいのです」と答えました。
(涅槃経、第十二)



◆ 解説

福の神と貧乏神は表裏一体、一心同体であるというお話。

この福の神の功德天女とは、「吉祥天」の事であり、黒闇とは「黒闇天」の事であり、今では吉祥天のみが有名です。やはり人間は縁起がいいものを祀りたいものですから、黒闇天は段々信仰されなくなったのだと思います。

それぞれ姉の功德天女は「生・幸せ・愛」に、妹の黒闇は「死・不幸・憎しみ」に譬えています。

私たちは「生・幸せ・愛」のみを喜び、これに執着するために、生(幸・愛)あるがゆえに

死(不幸・憎しみ)あるという道理を忘れ、「死、不幸、憎しみ」の方は恐れ憎んでしまいうため、生死・幸不幸・愛憎の迷いから覚めることができないうことを表している。

お釈迦さまが説かれた法句経という教えに、

「ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によつてつくり出される」

という言葉があります。私たちが毎日経験し、また目に見える生死・善悪・愛憎・苦楽・幸不幸などのすべて、これら二元性は私たち自身の心から生じてくるという意味です。自分のところが自分の世界を作っているわけですから、幸か不幸かはすべて自分のところが作り出しているわけで、外の世界には存在していないわけです。

私たちが幸不幸だと2つに分けているものは実は同じものであり、それを幸せとするのか不幸とするのは自分自身のところによるものです。

また、この話は幸せなことでもあれば不幸なこともある、幸不幸をほどほどに受け入れることも大事であると教えてくれています。嫌なことには目を背けたくなりませんが、善い事が転じて悪い事になるように、悪い事が転じて善い事になったりもします。

そのほどほどを受け入れるところこそが実は本当の幸せをつかむコツではないでしょうか。

ブツタの言葉

しょうじそくねはん
生死即涅槃

生死とは煩惱や迷い、苦しみの世界のことです。仏教では生まれては死に、死んでは生まれるという生死輪廻の世界を苦しみの世界と説いています。

「涅槃」とは、悟り、安楽の世界のことです。生死の苦しみは、

種々の煩惱が元になって起こると考えられ、原始仏教ではその煩惱を断つことで生死の苦しみから脱却し、涅槃という悟りの世界へ至ると説かれてきました。

しかし、煩惱を持つ一般人の在り方と悟りを開いた仏の世界とは相対するものではありません。生死を繰り返す人間の生を離れて涅槃はなく、涅槃を離れた生死というものもない。実は同一の世界。これがこの言葉の意味です。

人生の楽しみは、苦しい思いをしてやつと手に入るからこそ価値があるもの。悩みのない人生なんて、味気ないものです。

日々の生活を、悩み、苦しみながらただただ真剣に取り組むこと。そんな当たり前の日常の積み重ねが幸せへと繋がるのです。

